

「仕事も音楽も本気。バンド活動を趣味でやっているつもりはない」と話すのは、書籍と雑貨の複合店を展開するヴィレッジヴァンガードコーポレーションの奈良ファミリー店(奈良市)店長の宮地健作さん(35)。

インディーズのバンドで活動し、これまで製作したCDは二十作品以上。音楽イベント「フジロックフェスティバル」にも出演した。当面は、年内に初のソロアルバムを発表するのが目標だ。

中学生時代、ビートルズに触れ、ギターを始めたのがバンド活動にのめり込むきっかけだ。バンドを転々とするうち、ギター、ベース、オルガンと演奏する楽器も変遷した。「常に自分を進歩させたい」と三十歳になつてからはジャズピアノにも打ち込み始めた。

「当時の活気を、当時の音楽とともによみがえらせたい」と

目指すのは一九六〇年代のロックンロール。同時期に活躍したザ・ドアーズのあこがれのキーボードプレーヤー、レイ・マンザレクが実際に使った楽器を米国から取り寄せるなど、「音」には徹底的にこだわる。



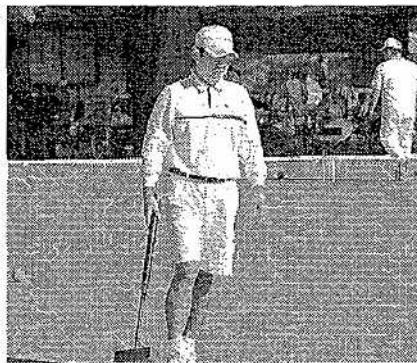
六月にはバンド活動で知り合った女性と結婚式を挙げる予定。仕事、家庭、バンド活動と忙しさは今以上となるが、「将来は夫婦バンドでもやりたい。形は変わっても一生、音楽活動は続けたい」と話している。

## 60年代のロック、現代に



## クローケー、5年で日本一

両足の間から振り子のようにスイングして球を打つ。ゲートボールの起源といわれるクローケー。東京都杉並区の高橋建設コンサルタントに勤める押田悟さん(48)は二〇〇六年十月、この珍しい競技の国内大会で優



勝した。クローケーは二色の木製ボールをマレットと呼ばれる木づちで打ち、順番に複数の鉄門をくぐらせて早くゴールした者が勝利する。「球の配置を考えながら打つスポーツはまさに芝生の上のビリヤード」。シヨ

ットにも色々やり方があって奥深い」とクローケーの面白さを語る。

国内競技人口は、盛んな欧米に比べて圧倒的に少ない。国内大会の出場者は毎年十人前後。「半年で国内チャンピオンにな

れるのでは」と意気込んで始めたが、十一二十年選手を相手に全く歯が立たなかった。思い直した押田さんは、平日に二、三時間ほど人工芝を張った自宅の庭で、週末には六時間ほど自宅近くの公園で練習を重ね、約五年後に優勝を飾った。

それでも押田さんの世界ランキングは約三千人中七百番。二世界で勝つためには一回のミスも許されない」。世界のトッププレーヤーとメールのやりとりをして戦略に磨きをかける。〇八年二月に開かれる世界選手権で、たった一人の日本人出場枠の獲得を目指し、猛特訓を続ける。